

公文式本市場教室 火・木 3~7時 TEL 61-4936(上平方)

横割教室 月・水 3~7時 TEL 61-8891(福島方)

指導者：新妻ゆき子 携帯090-2260-0671

Eメール:yvonne-yukiko@mbi.nifty.com

携帯アドレス:yvonne-1682-yukiko@docomo.ne.jp

ゆきこくもん

検索

ホームページ <http://www.yukiko-kumon.com>

2019年

ホームページへGo!→
スマホで教室だよりが見られます



教室だより4月号

お花見

日本人が「日本に生まれて幸せだなあ〜」と思うことに関するアンケートによると、「四季の美しさ」と答えた人が2番目に多かったようです。ちなみに1位は「食べ物がおいしい」。

春といえば「お花見」。日本で「お花見」が職場でも家族間でも、友人同士の集まりでもされるようになったのは、屋外で、大勢でおいしいお弁当を食べたり、お酒を飲んだりできるという日本ならではの土壌があったからではないでしょうか。それがなければ、今ほどお花見がはやってはいなかったかもしれません。

ちなみに、海外でもアメリカ・ワシントンD.C.のポトマック河畔の桜などは有名ですが、ワシントンD.C.では屋外での飲酒が禁じられているため、桜の木の下にレジャーシートを敷くピクニックスタイルではなく、桜並木の下をお散歩するのが主流で、せいぜい記念の写真を撮るくらいようです。

「お弁当」という日本独特のすばらしい脇役が、その存在感を発揮しているのかもしれませんが。そう考えると、2位の「四季の美しさ」と1位の「食べ物がおいしい」という2つの要素を楽しめる「お花見」が日本に定着しているのは当然といえば当然なのかもしれませんね。

公文式の創始者・公文 公（くもん とおる）先生の言葉より

“先へ進むことで自習する力がつく”

学年の内容より先へ進むことは、学校の成績を上げるばかりでなく、子どもの心の成長にも大きな効果をもたらすようです。子どもが「もっと先を知りたい」と興味をもったときに、年齢や学年にこだわってその気持ちに添ってあげないと、いつしか新しいものを発見する意欲を失ってしまうこともあります。

一方、公文式で学年相当より先の教材を学習している子どもたちを見ますと、高学年の子どもばかりでなく、幼児や低学年の子どもにも、自習する習慣が十分に身についているようです。「勉強は人に教えられなくてもできる」「少しぐらい難しいことでもやればできる」という自信もできてきます。そして、もっと先を知りたい、次にはどんな世界があるのだろうと自分から求めていくので、学習に集中し、これが学習意欲へと育っていくのです。

2019年 4月の学習日

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				
	昭利の日	退位の日				

本市場教室日 □

横割教室日 △

保護者様へお願い。

お休みのときは電話でもメールでも結構ですので連絡をお願いします。

4月分の会費引き落としは3月28日（木）です。よろしくお願ひいたします。

(注)休会・退会の場合は、引き落としの関係から15日までに申し出下さい。

教室からご家庭に連絡される生徒さんの場合は固定電話・指導者携帯電話・メール等はいずれも10円納入願ひます。

*学習終了後、学校の宿題をやってもかまいませんが、おしゃべりしたり、だらだらやる子は、即退出してもらいます。ご了承ください。

*ゆき子の一言コラム

公文式学習法

生徒・保護者の皆さま、進級・進学おめでとうございます。新しい学年の一年間も、いっしょにがんばってまいりましょう。公文式は学習の最初に「学力診断テスト」を受けていただき、その結果から「教材のどこから学習をスタートするのがいいか」を個人別に決定します。その後の学習の進み方も一人ひとり異なり、常にお子さまの学力に合った「ちょうどの学習」を続けていくのが公文式の大きな特長の一つです。これは、たとえば、水泳の息つぎの練習が一週間で足りる子もいれば、一か月必要な子もいるのと同じことです。一人ひとりのお子さまの「ここならできる」「わかる」に応じた教材を、一人ひとりのお子さまに適した練習量で学習していただくことで、これからもお子さまの学力を着実に高めてまいりたいと思っています。

子どものために“本当に”考えた学習法

公文式の知能教育が世間一般の知能教育と異なるところは、一人ひとりの子どもに合った個人別のちょうどの学習を進めていくという点です。もともと、子どもの能力には違いがありますから、同じ年齢という理由だけで、同一の学習をさせることが不自然なのです。学年別の画一的な教育では学力の低い子についてはついていけませんし、学力の高い子は足踏みをさせられることになってしまいます。子どもの現在の学力に合ったところから始めて、確実に学力を高めていく…本当に子どものことを考えれば、こうならざるを得ません。公文式は、一斉に受け身で教わるというのではなく、一人ひとりに無理のないちょうどの学習を自習で進めていくので、学力が確実に自分のものとなり、次第に自主性と自律心が養われ、学習習慣も身につけていくのです。こうして、着実に学習を進めていくうちに、知らず知らずのうちに学校の授業のレベルや範囲にとどまらず、自分の学年より2学年から3学年先の段階まで習熟していくことになるのです。

教育は、いつからどのように始めるべきか？

数学の学習を進めるうえでも、大きな役割をはたすものが国語力であり、公文では「二歳読書」という指導の目標があることも聞きましたが、乳幼児期の国語力育成の意義や方法、また、いつから教育を始めるべきかについて教えてください。

「ひらがな、かたかなを読めず、数字も1、2、3……とかぞえることもできない幼児。そのような幼児に知的教育をするとすれば、むしろ弊害が出るおそれもある。ひとりで文字や数字を覚え、学習のレディネス（適時性あるいは準備性）が整うまで待つべきである。」「学校へ行くまえの幼児に、知的な学習などさせる必要はない。幼児には親がひたすら愛情をそそいで情操教育をすることこそ大切だ。」

昔はこんなことを言う教育者や学者が多かったものです。しかし、はたしてそうでしょうか。

赤ちゃんに天井を向かせたまま、いつまでも寝かせっぱなしにして、ときおり子守歌をうたってやったり、「いない、いない、パア」をして遊んでやったりする程度のことが、親として「十分に愛情をそそぐ」行為であると言えるものでしょうか。また、言葉も理解できず、したがって親の言うことを聞きわけることもできない幼児に、どのような「情操教育」やしつけ教育が可能であるというのでしょうか。レディネスは子どもになんの働きかけもせず、放置したまま待っていたのでは、いつまでたってもやってくるはずがありません。子どもを知的な環境のなかに置き、知的な刺激を与えてこそ、子どもは知的な興味を示し、学習能力を発揮するようになります。言語が豊富な環境、すなわち会話が長く、本や新聞、雑誌など文字が多く目につく環境で子どもを育てた場合と、その反対に言語が貧弱な環境で育てた場合とでは、子どもの知的発育ばかりでなく、人間性の発達においても大きな差が生じてきます。

このことはアメリカや日本でも、早くから学者たちが調査、研究していることであり、私たちも多くの事例から、そのことを教えられています。

教室での決まりごと。

- ①はきものはきちんとそろえよう！
- ②あいさつは おおきなこえで はっきりしよう！
- ③もちものには なまえ をかきましょう！
- ④でんわをかりたら かならず でんわ代10円ん いれてください！